

若人と共に

想 隨



佐 藤 正 一

のできる文章である。

彼等は、我々教師が日頃考へてゐる以上に、良く自己をみつめ、「時代の流れ」を認識し、物質的には恵まれてゐるが、精神的には貧しい現代を乗りこえて、新しい展望を拓いてゆかねばならないと判断できる賢明さをもつてゐるのである。

私は、この現状認識の上に立つて、高校生の健全な成長をはかり、向上心の豊富な彼等の要請に応えるため、教師團としてどのように対応すべきか組織的に研究し、実践することを基本命題の一つとして、じっくり取り組んでみたいと考えてゐる。

X X X X X

次に、若い先生におくることばを述べみたいと思う。

私が教職に就いたのは昭和二十四年ですが、その当時のことを思い出してみると、生徒と共に、必ず先輩教師の顔が懐しく浮んでくる。

当時は「でもしか教員時代」と呼ばれたが、殊に私などは、浅学菲才、未熟なくせに強情で、「教育は情熱なり」と自信し、浅薄な判断で行動し、先輩に迷惑をかけたことが多々あつたと記憶している。

当時は何の娯楽もない時代であったので、多くの先輩の中に加えてもらつて、一升びんを立てて、深更まで教育論を闘わせるのが楽しみであった。

生徒の行動とか人格とかいうものは絶えず変容していくものであるが、教

師のそれも徐々にではあるが変化し成長する。

教育は知識・技術と全人格のぶつけあいの両側面をもつてゐる。そして人格には客観的な評価基準のようなものはない。それだけに間違いを起す可能性を秘めている。それで経験を積んだ先輩との人間的なふれ合いを得ることが必要だと考へるのである。

若い教師は情熱のあまり、ともすれば情熱的に流れやすい。それはまた、教師のもつあたたかみに通ずるものであり、貴重なものであるが、同時にまた、客観的に、科学的に生徒を理解するよう努めねばならないであろう。

周知のようによく学校教育は職員間の共通理解、共通実践が基調である。経験が三十年か一年かの違いはあるにしても、同じ士氣に立っているという点では、生徒に対する姿勢に統一的な部分が出せねばならない。

高校教師のようによく専門性の高い仕事をしてゐるが、それでも、斯うした中で、生徒に対する態度は、生徒の心に寄り添う傾向がないだろうか。経験の浅い先生が孤立して悪戦苦闘することのないよう、先輩教師が気楽に手をさしのべてやれる職場、希望保できるような学園にしたいと願つてゐる。

(福島県立原町高等学校教頭)

現在、高校教育をめぐる話題は、あまりにも豊富である。

新聞・テレビをはじめ、あらゆるマスコミに取り上げられ、慣れっこになつてゐる。高校生の多様化の問題、非行問題など、バターンがぎまつていて「ああ、またか」と見過されている。

このことは、我々高校教師の間でも例ではないと思う。

一部の高校生による非行問題が、大きく取り上げられ、その内容が刺激的で、強く印象に残るため、大部分の正常な高校生の、健全な、真摯な姿を見ると、多く影響を与えていると思ふのである。

次に、「原高新聞」最近号の「主張」の一部を掲げてみる。

「戦争を経てきた人々は、何事にも

貧欲だった。社会に束縛され、自由を失いながらも何かを求めていた。

与えられた物ではなく、自分自身の何かをつかみとるために、彼等は必死だった。彼等にとって、貧欲になることが、生きることそのものであつた。

しかし、彼等の時代は過ぎ去つた。自由を獲得し、物質が氾濫する現代、私達は環境が良くなるにつれて、与えられた物の中で、ゆっくりと歩くこと依存している。そして今、私達は眠つてゐるのかごとく生きている。満腹になって眠る猫のように、恵まれた環境に甘え、眠つてゐるのだ。

では、眠つてゐる私達に不満はないのだろうか。……以下略」

戦中派の私にとって、とても現代の高校生のものとは思えないほど、共鳴